

### 「沖縄、大きな輪」

牧師 横山順一

関西労働者伝道委員会の有志十一名で、一月二十六、二十七日、沖縄へ研修旅行に行つて来ました。最大の目的は、米軍普天間基地移設計画に伴う代替地・辺野古（この）の現状を自らの目で見ることにありました。

那覇に着いた私たちを迎えたのは、二十三日の陽気（この日は結局夏日になりました）。ヒートテックの服を着込んでたのは大間違ひすぐに汗だくとなり、半そでTシャツを速攻購入。

空港ロビーで、石橋教会の会員に再会する偶然から始まって、わずかに二泊三日の旅にたくさんのお出合いが与えられました。まさしく旅の醍醐味です。

丸木夫妻の「沖縄戦の図」を観に、佐喜真美術館を訪れたのは、十七時閉館の三分前でした。でも館長始め美術館の方々の「ゆっくりどうぞ」のおもてなし。「いつまで続くのか（米軍支配が）！」との憤りをさらりと語りつつ、無くなるまで闘い続ける強い意思を十分に受け取りました。美術館は普

天間基地に隣接しており、米軍フェンスで仕切られているのでした。オスプレイのために強化・拡大された離発着施設（ヘリパッド）の建設予定地・高江（たかえ）では、九州から数か月の予定で単身来ているKさんから、分かり易い説明を聞きました。政府の言う地元住民の負担軽減などまやかして過ぎず、闘わなければかえって危険や自然破壊が増すだけの近未来が待ち構えているのです。

辺野古の海は、本当に美しい「ちゅら海」でした。海辺まで伸ばして造られた米軍フェンスが、既に「平和」を分断していました。停泊する何隻もの海保巡視船が白鯨に、必死に抵抗するカヌー隊が子ウミガメに見えて泣けました。テント村で、そこに十八年毎日通い続けている一人のおじいとお出会いました。彼はそのちゅら海で洗礼を受けた人でした。

辺野古の現状を説明してくれたSさんは、後で聞くと、何と岐阜・各務原から移住して来た女性で、ちようど私が各務原教会にいた頃と重なっており、縁を感じました。

前日、翁長沖縄県知事が、あまりにもひどい防衛省や海上保安庁の、反対派に対する暴力的排除に、

建設停止声明を出したばかり（地元新聞では一面トップ記事）で、キャンペーンウェブゲート前は、想像していたより穏やかでした。不気味でもありませんでした。

北海道からの学生たちからも含めて初めて会う皆で手をつなぎ歌い、ダンスを踊って反対集会を繰り広げました。リードするYさんの豊かな表情とは正反対の、ガードマンたちの無表情が、「粛々と仕事を続行する」と表明している政府の冷酷さを表していました。

泊まった宜野湾セミナーハウスのM館長とは二十年ぶりの再会でした。短い時間でしたが、暖かい話を伺いました。

平和記念公園の電気バスの運転手さんからも、色々な話を聞きまししたし、久々行ったひめゆり平和記念資料館でも落涙の思いを胸いっぱい受けました。

すべてを書き切れませんが、どの方からも、平和への熱い呻きのようなガイド（導き）をいただきたい大きな輪の旅でした。沖縄には聞かなければ分からない歴史と命が満ちているのです。

伊丹に着くと気温四度。体感差を越えて本土の冷たさを思い出しました。どうかせんとあきませぬ。